

審査の結果の要旨

氏名 里村 嘉弘

本研究は、大うつ病性障害患者 45 名を対象として、多チャンネルの近赤外線分光鏡（Near-infrared spectroscopy: NIRS）を用いて測定した語流暢性課題中の賦活反応性を 1.5 年間隔の 2 時点で縦断的に測定することで、これまで報告されている前頭側頭領域の機能異常について、その状態依存性の変動と予後への影響の同定を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 初回測定時において、右上側頭回、右下前頭回、両側眼窩前頭回領域に概ね一致する領域の NIRS 信号が低いほど、うつ症状の重症度が高いという相関を認めた。そのうち、右下前頭回領域では、うつ症状の重症度と NIRS 信号の同一個人内における経時的な変動に相関関係を認め、状態依存的に変動することを示した。
2. 初回測定時と 1.5 年後測定時の NIRS 信号の経時的な変動性についての検討では、中前頭回領域において中等度の級内相関を認め、状態依存性の変動が小さいことを示した。
3. 初回測定時の左上・中側頭回領域の NIRS 信号が高いほど、1.5 年後のうつ症状の重症度が低いという相関傾向を認め、同領域の脳機能が予後に影響を及ぼすことを示した。

以上、本論文は、大うつ病性障害において、NIRS により測定した下前頭回領域の脳機能がうつ症状の重症度の変動に伴って状態依存的に変動し、一方で、中前頭回領域の脳機能はそのような状態依存性の変動が小さいことを明らかにした。また、左上・中側頭回領域の脳機能が予後に影響を及ぼす可能性を示した。さらなる精度の向上など課題は残るものの、本研究は大うつ病性障害における状態把握、予後予測のための客観的指標の開発に貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。